NUSOM サマープログラム体験記

072200481 西川知希

本プログラムにおいて、私はデューク大学から参加した Sophia のバディを担当しました。私は来年、2027 年にデューク大学とグラスゴー大学へ臨床実習として 1 か月ずつ行く予定であるため、今回初めて採用された海外学生とペアを組むバディシステムでデューク大学の学生と組むことができたのは本当に幸運でした。このバディシステムは非常に素晴らしく、1 週間という期間を通じて常に行動を共にすることで、表面的な会話に留まらない深いレベルでの文化や価値観の共有ができました。活動の合間には、互いのキャリアへの興味や生い立ちといった人生観から、結婚、食文化、言語の違いに至るまで、多岐にわたるトピックについて語り合い、友情を育むことができました。また、海外学生たちに簡単な日本語の表現を教える機会もありましたが、ほんの少し教えただけですごいスピードで単語を吸収していく姿を見て、彼らがやはりエリートであることを感じました。

初めて海外の学生たちと対面したオリエンテーションでは少し緊張しましたが、自己紹介の場で私が来年デューク大学へ行く予定であることを話すと大いに盛り上がり、すぐに打ち解けることができました。その後、名古屋大学病院の見学ツアーに参加し、病棟の患者病室やナースステーション、さらには手術室の見学を行いました。昼食は Sophia と一緒に学食でとり、デューク大学があるダーラムについての様々な情報や、デュークメディカルスクールのカリキュラム、現地の医学生が週末をどのように過ごしているかなど、リアルな学生生活について直接聞くことができ、非常に有意義な時間となりました。午後は、上田先生による医療倫理の講義に参加しました。小グループに分かれ、「Medical Ethics と聞いて何を思い浮かべるか？」というテーマでのディスカッションや、模擬症例を用いた PBL を行いました。議論の中では、常に日本とアメリカ、あるいはイギリスの医療制度や文化的背景の違いを比較することを意識しました。また、グループワークの結果を全体の前で代表して発表する機会がありましたが、このような英語でのプレゼンテーションの場を逃さず、積極的に立候補して発言できたことは、自分にとって大きな自信に繋がりました。続いて、Sophia が特に関心を持っている分野である老年内科の医局を訪問し、梅垣教授によるレクチャーを受けました。ここで最も印象的だったのは、レクチャー本編と同じくらいの時間をつかって質疑応答が行われたことです。海外の学生たちが次々と手を挙げ、主体的に質問を投げかけて活動に参加しており、その積極性に強い感銘を受けました。1 日の締めくくりとして会議室で開催された寿司パーティーでは、リラックスした雰囲気の中で様々なトピックを語り合いました。特に驚かされたのはアメリカ特有の社会問題についてです。薬物の蔓延や銃社会のリアルな現状、そしてそれが医療現場にも直接影響を及ぼしており、薬物依存の患者が日常的に多数運び込まれてくるという話は、日本では到底考えられないことであり、非常に大きなカルチャーショックを受けました。

プログラム中盤では、名古屋大学の Medical xR Center や大府市の国立長寿医療研究センターを訪問し、最先端の医療技術と高齢者医療の研究について学びを深めました。さらに、岐阜のかがやきクリニックや Cam Cam Swallow を訪問し、在宅医療や多職種連携の現場も見学しました。ここで私は、コミュニティ施設の成り立ちに関する日米の決定的な違いに気付きました。日本では、多様な医療施設やコミュニティ施設を作る役割は主に市町村や病院が担っており、寄付に頼ることはあまりありません。対照的に、アメリカでは寄付やボランティアの文化が非常に深く根付いており、様々な医療やコミュニティ施設が市民の自発的な貢献によって創られていることに深い感銘を受けました。

一方で、海外学生たちが日本の医療現場から多くの教訓を得ていました。彼らは、日本の充実した在宅医療モデルへのアクセスの広さに感心していました。また、患者の「生きがい」に焦点を当て、それを基準に優先すべき薬を決定することでポリファーマシーを減らすアプローチや、患者と医療提供者の間で共有されている文化的背景(特にアメリカではこれは当たり前のことではありません)が意思決定時の衝突を減らしている点に強い関心を示していました。さらに、レストランや温泉といった共有のコミュニティスペースが生活の中で重視され、それが全体的な健康に寄与しているという視点も、彼らにとって大きな発見だったようです。プログラム中に岐阜市で体験した鵜飼ディナーも、まさにそうした文化を体感する場となりました。私自身、岐阜に住んでいながら鵜飼を体験したのは今回が初めてでしたが、海外学生たちと船上で感動を共有できたこの時間は、今回のプログラムの中で最も楽しく、一生の思い出に残る素晴らしい経験となりました。

また、Dr. Desai の講義では、グローバルな感染症内科について学びました。すべての科において(特に感染症内科でその傾向は顕著ですが)、国際的な協力は不可欠です。しかし、このようなテーマを扱う授業は、アメリカでも日本でもそれほど多くありません。10年後のよりグローバル化されたヘルスケアを予期すると、今回のプログラムのように国際的な意見交換ができるプラットフォームは、今後ますます重要になると思いました。

日々のバディとの活動の中で、私は Sophia にアメリカの文化について様々な質問を投げかけました。しかし、彼女の答えの多くは「ひとによるけど…」という言葉から始まっていました。私は、この言葉こそが日本とアメリカの根本的な違いを最もよく表していると考えています。日本は比較的単一の文化を共有しており、「日本の文化とは？」と聞かれれば、ある程度統一された説明ができます。しかし、アメリカにはあまりにも多くの人種や文化が存在し、それらが混ざり合っているため、その複雑さゆえに「個人による」としか答えられないのだろうと考えました。

今後 10 年を見据えると、日本はより多くの外国籍の居住者を迎え入れ、移民を受け入れる可能性もあります。このような変化を考慮すると、アメリカが、高度に多文化な社会の中でどのように医療を実践しているのかから多くのことを学ぶべきです。例えば、アメリカの患者医師間の意思決定のプロセスでは、医師は多様な文化的・人種的背景を考慮し、コミュニケーションを慎重にとらなければなりません。現状の日本の臨床現場では、

こうした複雑な異文化間コミュニケーションは比較的稀ですが、今後は求められるスキルかもしれません。

医学部５年生の中盤に差し掛かった今、私は将来のキャリアについて真剣に考えなければならない時期に直面しています。この重要なタイミングで、極めて優秀なアメリカやイギリスの医学生たちと深く交流し、彼らのビジョンや姿勢に触れることができたのは、私にとって非常に有益な経験でした。たった１週間ではありましたが、英語でのスピーキングやリスニングが格段に上達した実感を得るとともに、医療に対する視野が国際的になった気がします。ここで得た国際性と、海外の医学生たちと築いたネットワークは、将来の私のキャリアにおいて、かけがえのない財産になると考えています。



